躍進する未来の力

株式会社　藤井工務店

～沿革～

昭和 20 年 3 月	初代藤井兼蔵、藤井組を創設
昭和 22 年 4 月	戸田組（現戸田建設）の北海道進出に伴い室蘭市に本拠を移転
昭和 28 年 4 月	事務所を札幌市豊平に移転、本格的な建設業に専念
昭和 32 年 3 月	事務所を札幌市北 23 条西 9 に移転
昭和 34 年 3 月	株式会社藤井工務店に改組
	代表取締役に藤井兼蔵が就任
	資本金 100 万円
昭和 34 年 6 月	初代社長死去
	長男兼光が兼蔵を襲名して 2 代目社長に就任
昭和 42 年 2 月	資本金を 200 万円に増資
	その後、昭和 54 年までに 11 回の増資実行
昭和 44 年 6 月	株式会社マイホームフジイ設立
昭和 44 年 8 月	社屋を札幌市北区麻生町 9 に新築移転
昭和 47 年 5 月	株式会社フジケン設立
昭和 49 年 3 月	一級建築士事務所開設
昭和 50 年 2 月	有限会社フジイ設立
昭和 55 年 6 月	石狩支店および東京・函館に各営業所を開設
昭和 55 年 7 月	資本金を 5400 万円に増資
昭和 58 年 3 月	石狩機材センター開設
昭和 61 年 4 月	鉄筋四階建立「藤寮」新築
昭和 63 年 10 月	東京営業所を関東支店に昇格
平成 2 年 6 月	創立 45 周年記念式典開催
平成 4 年 3 月	年商完工高 100 億円達成、TVCM 放映開始
平成 4 年 6 月	新規自社開発マンション「シェルピア西麻生」建設・販売
平成 5 年 3 月	シェルピア西麻生落成
平成 5 年 8 月	シェルピア西麻生完売
平成 6 年 3 月	副社長に藤井公人就任

平成 7 年 5 月	躯体事業部 中村静夫"建設優秀施工者"で建設大臣賞受賞
平成 7 年 6 月	創立 50 周年記念式典
平成 7 年 8 月	株式会社日天タイル工業傘下に入る
平成 8 年 8 月	「シェルピアルネス北大前」建設・販売
平成 9 年 8 月	「シェルピア北大前」完売
平成 6 年 3 月	副社長に藤井公人就任
平成 7 年 5 月	躯体事業部 中村静夫"建設優秀施工者"で建設大臣賞受賞
平成 7 年 6 月	創立 50 周年記念式典
平成 8 年 8 月	「シェルピアルネス北大前」建設・販売
平成 9 年 8 月	「シェルピア北大前」完売
平成 10 年 4 月	主たる取引銀行北海道銀行となる
平成 12 年 6 月	「シェルピア月寒西」建設・販売開始
平成 12 年 9 月	「麻香の街」Ⅰ・Ⅱ期建設・販売開始
平成 13 年 4 月	代表取締役会長に藤井兼蔵就任
	代表取締役社長に藤井公人就任
平成 13 年 8 月	「シェルピア月寒西」完売
平成 14 年 5 月	東京支店設立
平成 15 年 7 月	会長藤井兼蔵、建設事業関係功労で国交大臣賞受賞
平成 15 年 9 月	「シェルピア北 12 条」建設・販売
平成 16 年 6 月	ISO-9001:2000 認証取得
平成 17 年 7 月	「シェルピア北 12 条」完売
平成 18 年 9 月	アーキテクツ・スタジオ・ジャパン（ASJ）参画
	札幌北スタジオ開設
平成 18 年 9 月	株式会社 日天 社名変更
平成 19 年 4 月	東北支店設立
平成 20 年 5 月	会長藤井兼蔵、建設事業関係功労で旭日双光章を受勲
平成 22 年 6 月	OHSAS 18001:2007 認証取得
平成 22 年 6 月	創立 65 周年記念
平成 23 年 7 月	北区アダプトプログラム調印
平成 24 年 4 月	躯体事業部 "佐藤義一" 瑞宝単光章 叙勲受賞
平成 24 年 5 月	本社移転
平成 26 年 10 月	躯体事業部 "野上昌司" 国土交通省 優秀施工者（建設マスター）顕彰
平成 27 年 6 月	創業 70 周年記念式典

平成 28 年 6 月	札幌都市局長 感謝状
	建設事業部 "千葉 秀俊" 札幌市都市局 平成 27 年度優良工事施工業者表彰
平成 29 年 6 月	躯体事業部 "澤田 裕暁" 建設業労働災害防止協会北海道支部 功績賞表彰
	建設事業部 "坂口 文大" 札幌市都市局 平成 28 年度優良工事施工業者表彰
令和 2 年 4 月	ISO 45001 認証取得
	東北支店 東京支店に統合
令和 2 年 6 月	創業 75 周年
令和 3 年 3 月	副社長に藤井勢也就任
令和 3 年 10 月	躯体事業部 "柴田 卓" 国土交通省 青年優秀施工者（建設ジュニアマスター）顕彰
	躯体事業部 "竹澤 成司" 国土交通省 優秀施工者（建設マスター）顕彰
令和 4 年 3 月	躯体事業部 "中村静夫" 瑞宝単光章 叙勲受賞
令和 5 年 6 月	建設事業部 "石村 俊勝" 札幌市都市局 令和 4 年度優良工事施工業者表彰
令和 5 年 11 月	躯体事業部 "村田 和彦" 一般社団法人 札幌建設業協会 優秀従業員表彰



創　業　者

初代　**藤　井　兼　蔵**

会社のあゆみ

［創業期　昭和20年～36年　（1945～1961）　　17年間］

岩手が藤井工務店のふるさとです。風光明媚な三陸海岸。久慈・宮古・釜石・大船渡を結ぶ三陸鉄道。そして遠野・陸前高田。多くの社員・従業員の故郷である岩手こそが藤井工務店のふるさとです。

2011・３・11、大震災が我々のふるさとを襲いました。

故郷の親戚に、友人に、学友に被災者のいない人が無いほどの大きな震災でした。

あの震災を超えて今ふるさと岩手は再生の道を歩んでいます。これからも故郷のために出来ることを続けてゆきたいと思います。



岩手県釜石の藤井家　生家

初代社長は岩手県釜石の大工棟梁として青年期を過ごしていました。

技能職ということで召集はされませんでしたが、岩手に家族を置き一年の大半は東京への出稼ぎ生活でした。

戦時中には、戸田組の仕事が多く名義人の桜井氏のもとで現場職方の世話役として仕事に励んでいました。しかし、７人の家族を岩手に残したままの生活では、小さい子ども達もかわいそうと一念発起し昭和20年３月岩手県釜石にて独立し藤井組を立ち上げ戸田組の名義人となりました。

名義人とは現在のゼネコンの協力業者のようなものであり、藤井組・藤井兼蔵も戸田組の型枠工事、木造造作工事の直轄下請けとなったのであります。

しかし、戦火も厳しく拠点としていた室蘭では艦砲射撃を受け、釜石では空襲で財産を失うなど、逃げ惑う日々でもありました。

８月15日ようやく終戦を迎えたものの建築すべき建物はあれど、資材も輸送手段も限られ、日本中が今日食べるものにも事欠く厳しい時代でありました。

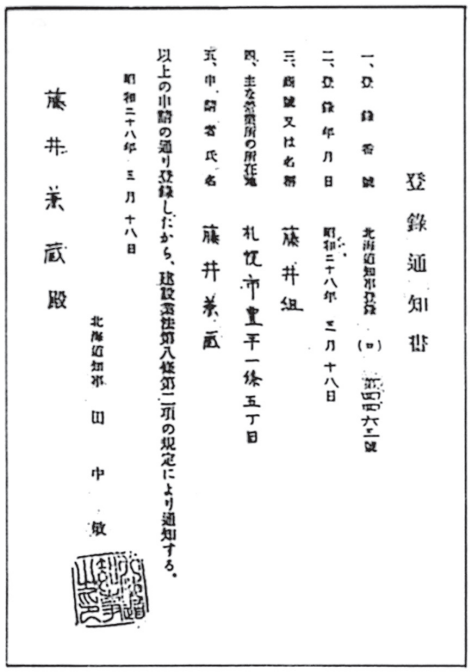
昭和22年４月戸田組の北海道進出に伴い桜井氏の推薦を受け、室蘭に事務所を構え北海道の復興に努めるようになります。



鴻之舞金山全景

昭和23年には北炭穂別鉱選炭所、住友鴻之舞金山選鉱場及び社宅工事など、いずれも山中の人里離れた作業所に従事しました。

この頃から初代社長の片腕となる平井里志さん（元専務）と仕事をすることとなりました。



登録通知書

一、登録番号　北海道知事登録（ロ）第四六三號
二、登録年月日　昭和二十八年三月十八日
三、商號又は名称　藤井組
四、主たる営業所の所在地　札幌市豊平一條五丁目
五、申請者氏名　藤井義一

以上の申請の通り登録したから、建設業法第八條第二項の規定により通知する。

昭和二十八年三月十八日

北海道知事　田中敏

藤井義一殿

昭和28年最初の登録通知書

平成３年に平井さんから聞いた当時の話です。

「昭和23年、先代社長の下で鴻之舞金山の工事に入ったのが最初の仕事でした。丸瀬布から鴻之舞まで山道を歩く。聞くところによると５里（20キロ）位あるとのこと、なにせ知らない土地、途中に金八峠があるというのですが、道を間違えて沢道に入り込み困っていました。

人っ子一人居ない所です。音を頼りにやっと木こりを見つけ鴻之舞への道を聞き出すことが出来ました。朝に出たのが到着は夕方になりました」

「３月も中旬なのに一面の雪でタル木を雪に差すと12尺（3.6m）ありました。ここに社宅を造るというのです。しょうがないので角材を全面的に雪の上に引いて作業所にして工事を始めました。毎日少しずつ沈んでいくのですが、終いに作業場の台が抜けてしまったこともありました」

「楽しみは盆の仮装大会でした。飯場の大鍋にロープをかけて人が入り『石川五右衛門鍋の中』なんて出し物もありました」

と思い出を語ってくれました。独特の大きく元気な声を思い出す人も多いのではないでしょうか。



豊平１条旧事務所の跡

さて、昭和28年３月には事務所を豊平一条五丁目の宮西宅に置き札幌工業高校出身の加藤さんを事務員として採用し本格的に建築業に専念することとなりました。

この頃の大工さんは、平井里志棟梁、大和田長平棟梁、吉岡都夫棟梁、月舘精一棟梁を中心に鈴木弘志さん、新沼長治さん、浅沼鎮雄さんなどが居りました。

現場も戸田組さんの下請けで、北大病院改築工事、旭川市役所新築工事、札幌中央電報局、自衛隊等多くの工事を手がけました。

藤井弘光元専務も昭和31年に平井さんの弟子として現場に入りました。

北大病院の工事は一期から三期まであり、飯場も北14条西５丁目の北大構内のいちょう並木の横にありました。多くの大工が寝泊りし、この飯場だけでも80名くらいはいました。その後も戸田組の下請けを中心に



昭和29年11月２日　北大病院上棟式　ゼネコン戸田組



昭和34年正月　北23条事務所前にて
後列左より代表、元専務、元常務、次女板東昭子さん
前列左より正光顧問、元監査役、初代社長



長女　荒澤レイ子さん

北大の中では音楽棟､図書館棟､クラーク会館工事へと進みました。

事務所も昭和32年３月には北23条西９丁目に新築移転し社長の自宅も造り、まだ釜石にいた家族を呼び寄せることができました。

従業員の宿舎も近くに建築し､北大の飯場から移る人もいました。当時の従業員は150名くらいになっていました。

千葉徹郎さん、長井忠雄さん、高橋政男さん、菅野（及川）五郎さん、荒井静雄さん、菊地知さん、新沼松雄さん、佐々木司寿夫さんなどもこの頃からの大工さんです。

藤井弘光元専務のこの頃の話です。

「スタートは北大医学部の工事で、その後は釧路教育大、美幌庁舎、室蘭と全道を廻って歩きました。朝は早く、夜も遅くとにかく疲れました。北大の飯場から狸小路の千秋庵まで弁当を持って歩きましたが当時は普通でした」

「現場の責任者になった時も最初は図面が頭に入らなくて、皆が寝てから紙を切ったり折ったりして実物を造ってみたりしました。とにかく無我夢中でした。それでも出来てみたら階段が一段多かったり、柱が合わなくて困ったこともありましたね」

昭和34年１月には、戸田組の協力業者会“札幌利友会”副会長に初代社長が選出されました。

３月には、株式会社藤井工務店へと組織替えをし資本金百万円として発足しました。

昭和30年～35年頃といえば、建築業界は不況の最中だったのですが、初代社長は今のうちに基盤を作らなければ、近い将来悔いを残すと判断し株式会社への組織替えを決断したのでした。

その矢先のことでした。札幌大通りの農林中金、室蘭の日鉄家族マンション、登別梅の屋旅館等を施工している頃、前年より身体の変調を訴えていた初代社長は、札幌医大病院に白血病として入院、昭和34年６月10日、帰らぬ人となったのです。あっという間の出来事でした。享年51歳でした。

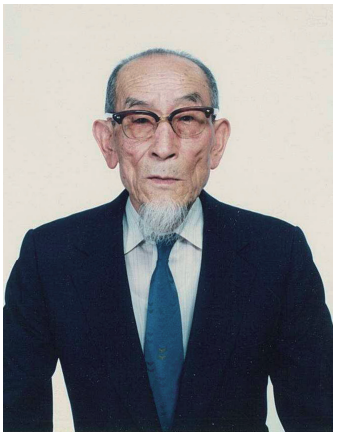
会社を組織変えし、これからという時にどんなにか残念だっただろうと思われます。

多くの従業員を抱え会社の存続がなにより大事な場面となり、当時はまだ学生であった長男の兼光があとを継ぐこととなりました。

日本大学建築学科に在学したまま兼光という名前から、父兼蔵の名前を襲名し二代目として社長に就任しました。

新社長になったので､中途退学し札幌に帰ることも考えましたが、これからの社会でしっかりした会社を作るためには、何よりも勉強が大事と学業を続けることとしました。

会社の現場関係は平井さんを中心に、事務関係は初代社長夫人の藤井コマさんと加藤さんが分担しました。又戸田組の当時建築課長であった鈴木一栄氏には何かにつき相談にのって頂き大変にお世話になりました。



鈴木一栄氏

二代目社長は大学卒業後一年間戸田組の仙台支店の現場で修行をしていました。

福島日興証券の現場、平市（現在のいわき市）労災病院の現場管理をさせてもらいました。所長の下の下みたいなものだったそうです。

ゼネコンの仕事に魅力を感じ、一時は戸田組の入社の話しもありましたが、鈴木一栄氏から「北海道の戸田組の躯体工事のメインとして藤井工務店を考え、二代目になるために仙台の戸田組に修行にだしたのに、何を考えてる！」と叱られ札幌に戻されたそうです。

青年社長も自分の生きたい道と、長男としての立場に悩んだ時期でした。

昭和35年には北海道で唯一、戸田組より優良協力業者として社長表彰を受けました。

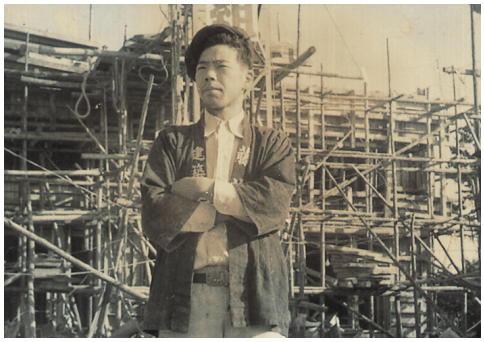
［成長期　昭和37年～56年　（1962～1981）　　20年間］

そんなこともありましたが、二代目社長は昭和37年に無事、帰札しました。しかしまだまだ経営も安定しませんでした。

又、若さから職人を使うことにも多くの苦労を重ねました。

「先代社長には世話になったが、若造の息子に指示されたくはない」と何人かの棟梁にも冷たくあしらわれたりしたそうです。

しかし持ち前の誠実さと昼夜を問わぬ努力により、社員・従業員の信頼も得、昭和40年頃からは北海道全域に250人以上の技能職を



藤井組のハッピを着た大工さん

擁するまでに成長し会社を安定させてきたのです。

この頃には現場関係は四つのグループになり、平井さん、大和田さん、吉岡さん、月舘さんがまとめていました。

38年には藤井勝生さんが大工さんとしてスタートしています。

当時の雇用形態はグループ別の請負制で給与は四人のグループ長に支払い、それを各長がグループの大工さんに配分する方式でした。会社はそれを報告させ帳簿につける方法を取っていました。

古くからの徒弟制度に近く、末端の大工さんからの不満も多く、又会社経営の近代化からも多くの問題点がありました。

改革には抵抗も伴いましたが、健康保険や失業保険（雇用保険）のこともあり、全ての大工さんに会社が直接給与を支払う方式を断行しました。悩める新社長が信念をもって行った大きな改革でした。

二代目社長の新しい経営感覚、的確な指導による会社の改革は、その後の発展に大きく寄与することが出来、より多くの大工さんのやる気を引きだすことにも成功し、後の訓練生を含む若手大工の育成につながっていきました。

藤井昭光元常務のこの頃の話です。

「私は事務からのスタートでしたが、大工さんの送迎も担当していました。正式な車種は覚えていませんが、車の荷台に幌をかけ人が乗れるようにした、ダイハツの『ロンパ』と呼ばれていた１トントラックがありました。それに、大工さんを乗せて会社と現場の送り迎えをするのです。もちろん朝は一番早いし、絶対寝坊は出来ないし送ってきてから事務仕事をするのですが、雨になると何時でも迎えに行かなくてはならず大変でした」

「釧路にも室蘭にも大工さんがいましたし、当時は銀行振り込みなどという便利なものも無く、リュックサックに現金の入った給与袋をいれて夜行列車で運びました」

経理、総務システムの基礎を創ってきた元常務も青年時代は何でもやらざるをえませんでした。

“北海道の型枠工事は藤井”といわれるまでに成長はしましたが、反面規模が大きくなりすぎて管理に限界も出てきました。

特に心配だったのは、安全教育の徹底と、労務管理でした。

社長を始めとした幹部社員の目配りが届かない所があちこちに出始じめてきました。

何かと、お世話になっていた戸田組の鈴木一栄氏にも相談し地方の分社化に踏み切る道を選びました。

引き続き戸田組に支援を保証して頂き、釧路地区は吉岡工務店として、室蘭地区は月舘建設として二人のベテラン棟梁にのれん分けをして独立してもらいました。

この頃には下請けの躯体工事の他に、木造造作工事等の一括工事もスタートしていました。藤井工務店の岩手出身の大工はほぼ型枠工事と木造造作工事ができました。



平成23年までの麻生本社（S44年８月完成）

又、建築とは切り離せない土地の取得や売買にも業務を広げ関連会社として㈱マイホームフジイを設立しました。

昭和44年、手ぜまになってきた北23条に変わる事務所・宿舎を麻生町に自社で建築し移転しました。社員・従業員待望の引越しでした。

1200坪の広い敷地があり、事務所も㊫マークの入った当時としては近代的な施設でした。宿舎も70人位は入れるものでした。

会社設立当時から戸田組を筆頭に大手ゼネコンの下請けで躯体工事の専門業者として経営してきましたが、材料はほとんど元請より支給され現場の作業に当たっていました。いわゆる手間のみでした。

コンパネ等を買うこともなく自己資金が無くてもなんとかなる形態でしたが、生産性を向上させるのは難しく仕事の利幅も限られています。

昭和45年には麻生に資材センターを作りなんとか材工一括に移行しました。

北海道の型枠業者で材工一括を実現したのは藤井工務店が初めてでした。最初の現場はデパート㊫さん筋向いの長崎屋デパートでした。その後の中央区役所等も材工一括を軌道に乗せる型枠工事でした。

又、社長の念願であった一括工事にも本格的な取り組みを始め、その部門の社員として札幌工業高校卒の中野健一さん、帯広工業高校卒の千葉一夫さん、苫小牧工業高校卒の松岡秀夫さんを採用しました。

その後、千葉さん、松岡さんは本人の努力もあり難関の一級建築士の資格をとりトップ技術者としても活躍されました。

型枠大工さんでは村上恒夫さん、中村静夫さんなどが、造作大工さんでは福田利昭さんがこの頃からの勤務でした。

又、社員は宮さん、澤内さん、高玉さん、江上さんと年々増えてゆきました。



北23条旧事務所の跡地のアパート（営繕課で建築）

関連会社として木工事関係の製作などを行う会社、“㈱そうもく”を麻生の敷地内に立上げました。社長の義兄の荒澤さん、村上さん、鷲尾さん、岡田さんが協力して頑張っていました。

又、建築資材のリース、販売、建築工事の㈱フジケンを設立し、藤井家の長女、荒澤レイ子さんが社長に就任しました。

高度経済成長によりＧＮＰ世界二位となった日本、その中での北海道の発展、札幌冬季オリンピックの成功と世の中は大きく変わる時期でした。

この発展は真面目で勤勉な日本人の努力によるものが大きかったのですが、とりわけ建設業界の革新と成長がそれを可能にし、わが社もその一翼を担えたことを誇りと思います。

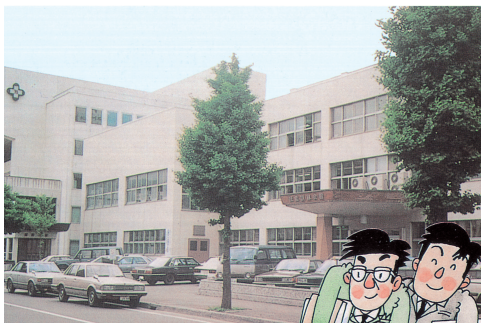
特に当社の型枠工事では積雪寒冷地北海道の気候風土に合ったビル建築を目指し、常に新技術開発に力を入れ成果を上げてきました。

その例を紹介しますと麻生本社の塀に長く残っていた、躯体コンクリート打設と同時に外装タイル張りを行う「打ち込みタイル工法」があります。大通の札幌ＫＴビルが北海道では最初の工事でした。

又、コンクリート躯体にサッシ枠を組み込む「サッシ先付け工法」にも先鞭をつけ新琴似のスカイハイツで施工しました。

ゼネコンの指導の下とは言え、それを可能とする技術力、技能職に高いレベルが備わっていたことが、施工を可能にしました。

かつては建設技能職は労務者と呼ばれていました。いわゆる３Ｋ職の代表のような立場にありましたが、日本経済の根幹をなすインフラの中心である近代的建造物を造る技能者は、本来もっと高い評価を得るべきであり、社会的評価や、給与、福利厚生についても、もっともっと改善し質の高い労働力を確保すべきだと考えていました。



訓練校

こうした中、躯体工事業者全体の質的向上を図るために、北海道建設躯体工事業協同組合（現　北海道型枠工事業協同組合）の結成に参加させてもらいました。

組合の目的は相互扶助の精神のもとに、組合員及びその所属従業員に関する社会的地位の向上と、企業の経営合理化、技術の改善向上、労務管理の是正、適正なる請負単価の設定等多岐にわたりました。

社長は北海道建設躯体工事業協同組合の副会長などの役員として、長期にわたり業界の発展につとめています。

こうした観点にたち、特に若年技術者の雇用、教育、育成にはひたむきな努力をしてきました。

夏の暑いさなか、毎年、東北、北海道の各高等学校を訪問し、新卒者の採用活動に当たってきました。青少年の確かな未来を切り開くためには、本人のみならず両親、教師の理解が必須であります。

昭和45年に開校した知事認定の北海道建設高等職業訓練校では協会理事も歴任し積極的に関わって新卒者の教育をしてきました。

新卒の技能者に就学の機会を与え、早期に技能をマスターさせる体制は、両親や教師の皆さんにも大きく評価を受けてきました。

藤井工務店から訓練校に通学した生徒は、設立以来、数百名にも及び業界でも一番多くの卒業生を出しています。その卒業生は藤井工務店のみならず躯体工事業界技能者の主力となり北海道の躯体工事の品質向上、生産性向上に大きく貢献しています。

（これは、資料として添付した平成５年の「型枠エンジニア新入生募集ガイド」に掲載しています）



宮さんと千葉さん

昭和49年には一級建築士事務所を開設し、昭和50年には建築、土木、住宅の一括工事部門を建築一課として藤井弘光さんが担当し、躯体工事部門を建築二課として藤井勝生さんが担当する二課体制をとりました。

昭和53年当時の完工高は18億円程度でしたが一課、二課体制が日本の成長期と相まって年々増加してゆきます。

建築資材のリース、販売、建築工事の㈱フジケン、不動産管理を行う㈲フジイを設立しました。

会社の成長と伴に資本金も幾度にわたり増資し、昭和55年には、5400万円にしました。

この頃には石狩花川南２条５丁目に石狩支店を開設し、東京、函館にも営業所を開設しました。

昭和56年には一括工事の大曲柏葉台団地建築工事やＪＶ工事で労働基準局長表彰を受けました。

型枠部門も戸田建設㈱以外に㈱竹中工務店、前田建設工業㈱、㈱鴻池組、佐藤工業㈱、岩倉建設㈱、大成建設㈱などの工事を請け負うようになりました。

［発展期　昭和57年～平成12年　（1982～2000）　19年間］

建築・土木・木造住宅の一課、躯体の二課体制も功を奏し、一括元請工事も躯体工事に肩を並べるまでに成長し、二本立ての経営も軌道に乗ってきました。

年々完工高も増加し昭和56年度には30億を突破しました。社員・従業員も増加し会社としても安定してきました。

こうした中、㊒の旗の下に結束する方向性をスローガンとして決めました。

まず社長が常々言っていた建築業としての基本を施工四大目標として掲げました。

我が社の施工四大目標（ＳＳＴＣ運動）

- 安全に　**SAFELY**（セィフリー）
- 速　く　**SWIFTLY**（スィフトリー）
- きれいに　**THORWUGHLY**（ソローリー）
- やすく　**CANSCIENTIOUSLY**（コンシェンシャスリー）

＜安全に＞　工事の安全は、私たち建設業にとってもっとも重要な課題です。現場の安全を確保するために、日夜絶え間ない努力を続けています。事故を絶滅して、従業員が安心して仕事に励んでこそ、高品質の建造物を建て、お客様の信頼に応えることができます。

＜速く＞　冬が長い北海道では、建築工事の工期が季節により大幅な制限を受けます。こうしたハンデキャップを克服するためには、より速く確実な施工が求められます。私たちは、技術水準の向上と新技術の開発で、常に工期の短縮を心掛け、お客様の信頼にお応えするよう努力してゆきます。

＜きれいに＞　きれいな仕上がりは、整理整頓された現場から生まれます。私たちは、作業工程の全般を通じて現場の整理整頓を心掛け、常に完全な作業を行うよう気を配っています。そうした努力によって仕事の質を高め、より優れた製品を生み出す基礎になると確信します。

＜安く＞　どんなに質の高い仕事でも、そのために経費がかかりすぎたのでは意味がありません。最高の品質を最小の費用で生み出すこと、それが私たちの目標です。そのために常に誠実に仕事に取り組み、極力無駄を排して、効率的な作業を進めるよう努力を続けています。

更に社員・従業員の社会人、企業人としての基本を五つの力として明確化しました。

躍進する未来　五つの力

努　力	●常に、あすに向って目標を定め、あすの変化に対応できる創造力と技術を養い、躍進する未来の力となろう。
勤　勉	●常に、創意工夫により進歩改善をはかり、前進することを心がけ、躍進する未来の力となろう。
親　和	●常に、目標達成のために、協力と協調を心がけ、躍進する未来の力となろう。
健　全	●常に、精気をもって職務にあたるために、規律ある生活と心身の鍛錬を心がけ、躍進する未来の力となろう。
忍　耐	●常に、困難や障害にくじけず、いかなる仕事も成し遂げる勇気と忍耐力を持ち、躍進する未来の力となろう。

毎日の社員朝礼、各会議で唱和する五つの力は、最初は「ちょっと説教ぽいかなぁ」と思うのですが、何かあった時は社員としての原点を過不足なく網羅していて自己点検にも役立っています。



石狩センター

石狩の新港南３丁目に約７千坪の広大な敷地を購入し資材センターを移設したのは昭和58年でした。

コンパネを備蓄・管理・保全し、パイプ・サポートを保管管理し、施工現場までの運搬も藤井の運転手さんで行う体制を作りました。又、現場では製作が難しい型枠をプレカットする木工場も作りました。

昭和61年には、麻生９丁目本社社屋の敷地に鉄筋四階建ての“藤寮”を建築し型枠技能士及び訓練生の独身寮を充実しました。

先に述べた若い技能職の雇用・育成には職能教育は勿論ですが日常生活の安心・安定が重要であり、従来のようないわゆる「飯場」的な宿泊施設では将来のある青少年を育成出来ないと考え、雇用促進事業団の協力を得て業界では初めての鉄筋コンクリート造の独身寮でした。



藤寮

寮施設は一人一部屋で各室に電話もある全面タイル張りの近代的な建物でした。当時の本社社屋より格段に立派で、初めてのお客さんは勘違いしてまず寮に行くくらいでした。

この頃には大工さんは13のグループがありました。

鈴木弘志、新沼長治、荒井静雄、千葉徹郎、長井忠雄、菊池知、浅沼鎮雄、高橋政男、佐々木司寿夫、新沼松雄、村上恒夫、都竹力、中村静夫の各棟梁でした。

北海道では厳しい冬の季節には“降雪・シバレ”により建築工事がストップし大工さんはやむを得ず離職し、いわゆる失業保険で食いつないでいくしかない状況でした。

全員の大工さんとはなりませんが、冬期間は藤井勝生さんを中心に仕事を見つけ、関東や静岡への出稼ぎでしのいで少しでも収入を増やすように努力していました。

しかし、冬場だけの出稼ぎとなるとどうしても割が悪い仕事が多くなり、社長の決断で一年中関東の仕事をすることに決めました。

藤井勝生さんと尾崎稔さんが駆け回り千葉の八千代市勝田台に支店の開設にこぎつけました。



大日寮

千葉市の大日町に1200坪の土地を手配し宿舎、事務所をつくり、材工一括でスタート、後に資材センターも開設し本格的に関東での仕事を軌道に乗せてきました。

通年で大工さんが常駐し関東方面の現場施工を行っています。冬場には北海道で仕事が無くなる大工さんが応援に入る体制ができました。

東京ドームも、㈱竹中工務店の下で当社の大工さんが大勢参加し、冬場は北海道からの応援者も多数いました。

その後は、藤井弘光元専務、千葉正志さん、高橋茂さん、中野敏彦さんが中心となり引き継いで来て、関東支店も無くてはならない当社の大切な拠点として成長しました。

しかし、ここまで来る過程では藤井勝生さんが体調を崩し、帰札し長期入院となったこと、尾崎稔さんが業務中の交通事故で亡くなるなど、尊い犠牲をはらって関東支店が軌道に乗ったことは会社としても胸に刻まなければなりません。

藤井勝生さんはその後健康を取り戻し、常務、顧問として躯体事業部全体の指導にあたっています。

通年雇用を広げたとはいえ一人一人の大工さんは家族の大黒柱、長期間にわたってお父さんが留守にするのは不安と寂しさがあります。

こうした家族の心配を少しでも和らげるため過去においては、社長自ら各家庭に手土産をもって訪問し励ましてきました。

社長は、それ以前から、社員・従業員にお子さんが産まれた時にはお祝いを持って駆けつけることを続けています。

こうしたことが、家族からも会社への愛着を感じてもらい、社長が強く慕われ感謝されている要因ともなっています。

安全衛生活動にも最大限の配慮をし、他社に先駆けて「危険予知活動」も行い、全従業員を集め、毎年安全大会を開催し、５年毎の永年勤続者の表彰もおこなっています。

一括工事部門では､「藤友会」という協力業者会も結成しました。

各協力業者さんが屋台骨となって強固に支えて頂くことにより建



藤友会総会

設事業部の今日の発展があります。

初代会長には㈲沢井板金工業の澤井社長、二代目に㈱日天タイル工業の三上社長、三代目には㈱小林本店の江藤専務、そして四代目には出村左官工業㈱の出村社長の各会長に会をまとめて頂いています。

毎年の総会時に安全大会もあわせて開催しています。

会社の組織体制も一課､二課体制から事業部体制へ移行しました。

営業本部と建設事業本部、ホーミング事業本部（住宅事業部）、躯体事業本部の三つの現場別事業部、そして管理本部としました。

又、13グループあった大工さんは型枠工事一課、二課、三課体制になり、高橋政男統括リーダー、千葉徹郎統括リーダー、中村静夫統括リーダーのもとに統合され進んでいました。

さて会社の安定と更なる前進を模索していた二代目社長は様々な観点から㈱タナベ経営の指導を受けることにしました。

まず最初に明確にしたのが“経営理念”でした。これは松下幸之助さんを慕い、学んでいた社長の信念をベースとして決められました。

我が社の経営理念

会社の繁栄をもって全社員の幸福と国家・社会に貢献することを経営の基本理念とする。

昭和61年度からは毎年「経営方針書」を作成し、会社、各部の年間方針、行動目標を明確にし、社員全員による経営方針発表会も行っています。

その一回目の「社長のことば」の一部を紹介します。

（松下幸之助の“経営百話”を下敷きにしています）

「経営の基本理念と言うことについて、皆様と考えてみたいと思います。この藤井工務店という会社が、何のために存在しているのか、この経営を何の目的で、又どんなやり方で行っていくかという点について、我々は正しい考えを持つことが大切ではないかと思うわけです。

『藤井工務店は､誰のものか』私は藤井工務店は、形の上では私のものである。あるいは私共のものであるという事だとおもいますが、もっと深く考えてみますとそれは違うと思います。通念としては考えられますが、実質は、国家全体のものではなかろうかと思うわけであります。国家全体の共有財産である。それを私が、私共が預かって経営していると考えます。そう考えることにより『藤井工務店を大

事にしなければ』という気持ちが生まれて力強い企業活動が展開される様になるということではなかろうかと思うわけです。

まず企業は公のものであるという原点こそが最も大切であり、したがって藤井工務店は形こそ個人のものでありますが、その実質は国民全体の共有財産であり、それを私が私達が預かって経営しているという観点に立たなければならないということであります。藤井工務店はこの様な企業観、経営観を持って運営されている、ということであります。

私達はこの様な考えを持って、経営の基本理念を考えなければなりません。それでは実際どのようにして運営していくかという問題でありますが、それは企業というものは、よく言われるように、人、物、金、ということであります。それをもとに事業経営を行う訳ですが、事業経営において欠くことの出来ない大切なものは利益であります。我々はこの様な尊い使命をもって会社を運営しているわけでありますが、それにはどうしても資金が必要であります。その資金を利益という形において頂戴するということです。

頂いた利益の一部は我々の生活、すなわち、給料等に使いますがその大部分は会社の資金として、会社の発展、国家社会の発展に使わなければなりません。そういう尊い使命があるために、100万円かかるものは、120万円要求する。20万円は利益という形で頂くわけであります。その様に考えて藤井工務店が経営されているということです。

しかし、考えなければならないことは、会社が利益を上げるために経営するということではなく、利益は社会へ奉仕貢献したことに対する報酬で得られるということであります。すなわち、我々の仕事がお客様に満足を与えているかということであります。

我々の仕事がお得意様に満足を与えていればいる程、それは利益として返ってくるということであり、いくら我々がもっと利益を上げたいと思っても、我々のする仕事が、その利益に相当しない様な仕事であれば、次第にお得意様から見放されていくことになるということです。このことは会社経営において最も重要なことであり、『天下の金、天下の土地、天下の人を使って会社を営んでいる以上利益を上げられないということは、罪人であり、罰せられなければならない』という考え方にたって、私は経営にあたって来たつもりですし、これからもそういう考えに立ってやっていきたいと思っています」。

年号の変わった平成元年には建設事業部、ホーミング事業部の一括工事で35億円、躯体事業部で25億円、合計完工高60億円を達成するまでに成長しました。

経営も従来からの建築請負業にとどまらず、土地を含めた建築の提案を行う、開発営業にも着手しました。

麻生の元本社前の住友不動産の麻生シティハウス建築等も開発営業の成果でした。

更に、マンション販売事業にも挑戦し、シェルピアシリーズを展開しています。

これは、西麻生を皮切りに、ルネス工法による北大前、月寒西、北12条の４棟を建築・販売してきました。

特に最初の西麻生のときは全社員にマンションのネーミングを募集し、営業本部の平尾由紀子さんから提案された“シェルピア”が採用されました。

シェルという英語は直訳は貝殻です。日本語では貝殻には“財産”や“住まい”のイメージもあり、ユートピア（理想郷）のピアとの結合により「大事なもので家族の理想郷を予感させるマンション」という素晴らしいネーミングでした。



初めての事業で規模も124戸と多く、色々な苦労も伴いましたが、社長の次女の藤井（有田）桂子さんにもモデルハウスの受付担当をお願いし、全社員の決起集会・販売協力、協力業者の皆さんの応援にも助けられ完売にこぎつけました。

又、住宅事業部では従来からの注文住宅に留まらず、分譲住宅（建売住宅）にも手を広げ平成17年ころまでに・屯田・東茨戸・手稲前田・石狩花川・あいの里・太平・拓北などで100棟ほどの販売をしてきました。

企業文化を構築し特性や独自性を統一されたイメージで発信する、ＣＩプロジェクトにより新しいシンボルマークを決定しました。

㊒の会社屋号マークとは別に藤井工務店のFを基調にしたシンボルマークが出来、会社のトータルビジョンを象徴した新しい“身分証明書”となりました。このプロジェクトは藤部英一さんを中心に進められました。

平成３年度には待望の年商100億円が達成されました。

建築工事、土木工事、住宅工事の一括工事部門等が57億円、本社と関東の型枠工事部門が44億円でした。

社員・従業員の結束を図るために安全大会の他にも、以前から観楓会(北海道の秋の旅行会の呼び方)や新年会などの福利厚生も行っていましたが、更に会社や仲間を知るために社内報“みらくる”を発刊しました。

平成４年には山本一郎さん、大山浩司さんなど10人の新入社員、15人の訓練生とかつてなく多くの仲間を迎え、会社の規模も拡大しました。建築業の制約から現場直行・直帰が多く会社にどんな仲間がいるか分からないことが多いのですが、社内報により少しは親しみも持てるようになりました。

（別途参考資料として“みらくる”表紙と記事の一部を掲載しました）



みらくる　92年新年

平成６年には社長の長男、藤井公人が副社長として就任。

社長と同じ日本大学の出身で専門は経済でした。卒業後㈱タナベ経営で３年間修業を積んでの入社でした。

㈱タナベ経営では、主に手帳販売の営業で鍛えられたそうです。

一日500件の電話アポイントをして面談の予約をお願いします。

初めのころは５件がやっと、コツをつかんでも20件が精一杯だったそうです。同じビルの会社を１階から20階まで各階を飛び込みで廻って営業したこともあるそうです。

平成７年には中村静夫さんが建設大臣賞を受賞。

道立文学館工事（ＪＶ）で北海道教育委員会から、札幌市立病院看護婦宿舎・保育所工事（ＪＶ）で札幌市長から感謝状を頂きました。


中村静夫職長

６月には創業50周年記念式典を札幌テルメ（現ガトーキングダムホテル）で開催。

特記事項としては、技能職の厚生年金への加入があります。会社と従業員が保険料を折半する厚生年金は会社の負担も大きく、尻込みする中小企業が多いなかで、藤井工務店は平成７年には技能職も加入しました。大工さんの中には折半の自己負担があり、直接の手取り給与が減るので反対する人もいましたが、制度の意義を説明し加入しました。



技能職にも厚生年金をかける会社はまだまだ少なく、今では老後の安定、安心につながることが理解され大工さんにも強く支持されています。

平成８年には、当社の協力会社でもあった三上洋右さんの経営する㈱日天タイル工業が藤井工務店のグループ企業として参加をしてもらうことになりました。平成19年には㈱日天に社名も変更しタイル工事だけではなく建築一括工事にも進出しています。


曼月居

後に「北海道建築賞」「日本建築学会作品賞」を受賞する建築家、齋藤裕氏の設計・監理による“曼月居”を札幌市宮の沢にて施工しました。

難易度の高い建物で鳴海棟梁・飯田棟梁などが木造造作を担当し、建具工事は㈱鷲尾建具さんでした。

㈱鷲尾建具の社長から「チャント真直ぐな建具を造れとはよく言われましたが、初めて曲がった建具を造れと言われました」とＲの建具まである作品でした。

いわゆるバブルの崩壊と平成不況は建設業界を直撃し北海道では誰もが考えなかった北海道拓殖銀行が経営破たんしました。

当社のメインバンクでしたが、翌年、北海道銀行をメインバンクとさせて頂きました。

平成11年には藤井兼蔵が戸田建設㈱札幌支店の協力業者会“札幌利友会”の会長に選出され平成17年まで努めました。

［成熟期　平成13年～26年　（2001～2014）　14年間］

2001年、21世紀が始まった平成13年、我が社も新しい時代を迎えました。

藤井兼蔵二代目社長が会長となり、副社長の藤井公人が三代目社長として就任しました。34歳の若社長の誕生であります。

「まだ60代なのに。まだ元気なのに。もっと社長続けて」という周りの声にも、兼蔵会長は「社長業も40年もやってると疲れ果てる、

若い感覚で会社を進めるチャンスだ」と譲りませんでした。
躯体事業部が型枠工事に参加した札幌ドームが、大成建設㈱と㈱竹中工務店のＪＶで完成しようとしていた時でした。

平成14年、モエレ沼公園のガラスのピラミット工事（ＪＶ）に参加。
後日、札幌市都市局長からの感謝状を頂き、更に、北海道知事から赤レンガ建築施工賞も受賞しました。

新たに東京都台東区浅草に東京支店を開設し、更に積極的な展開を行っています。

平成15年、藤井兼蔵会長が建築事業関係功労で国土交通大臣賞を受賞しました。
札幌ドームを本拠地とした、北海道日本ハムファイターズが誕生したのもこの年であります。

平成16年、ISO9001：2000認証取得。
高橋茂さんを中心に全社員が取り組み、トレーサビリティに汗を流しました。
躯体工事部門でＩＳＯを取得したのは、当社が道内初でありました。


MSA-QS-2586
CM024
登 録 証
株式会社 藤井工務店
本社
北海道札幌市北区新琴似7条17丁目4番3号
MSAの品質マネジメントシステム審査認証制度に基づき審査した結果、下記の内容について認証されたことを証明します。
認証された品質マネジメントシステム
建築物の設計及び施工、並びに土木構造物の施工、
並びに付帯サービス
（適用除外：なし）
認証範囲に含まれる関連組織
（登録証に記載されないサイトはMSAのホームページに掲載するものとします。）
JIS Q 9001:2008 (ISO 9001:2008)
認証番号 MSA-QS-2586
認証日：2004年 6月22日 再認証日：2013年 5月29日 有効期限：2016年 6月21日
MSA 株式会社 マネジメントシステム評価センター
代表取締役社長 塚越 修

ＩＳＯ9001：2000認証状

この頃、藤井公人社長は札幌で開かれた青年会議所（ＪＣ）世界大会の手伝いや、平成17年（2005年）の札幌青年会議所理事長を務め、経済界での人脈形成、組織の取りまとめや運用などにも尽力し経営者としての成長にも努力していました。

平成18年、住宅部門がアーキテクツ・スタジオ・ジャパン（ＡＳＪ）に参画し、設計事務所とタイアップした住宅建築へチャレンジしました。
ファクトリーホールなどで集客イベントを開催し、麻生本社を一部改築し北スタジオを開設しました。

平成20年、仙台に東北支店を開設し支店長に中村静夫さんが赴任しました。

５月には藤井兼蔵会長が建築事業関係功労で旭日双光章を受章しました。（後述します）

藤井公人社長の平成21年新年挨拶を社内報から転載します。

「平成21年の新年にあたりご挨拶を申しあげます。

昨年からの米国の金融危機が世界同時不況へ波及するという事態があり、また、北海道でも暗い話題ばかりの昨今です。

私たちも、しばらくの間、景気は良くならないことを念頭におき行動することが必要です。常々言っている通り企業は環境適応業といえます。時代の厳しさに引きずられることなく、先手を打っていくことが問われています。

こうした状況ですので、会社として、改善すべき点、または見直し等たくさんありますが、今年の具体的な課題について３点だけ触れさせて頂きます。

まず第一に躯体事業部は軌道に乗ってきた東北支店と、東京支店に仕事の量をシフトして行きます。会社としても体制の整備と共に新しいお客様を獲得して行くことが使命となります。

皆さんは、これまで各ゼネコンから評価されて来た藤井工務店の技術をいかんなく発揮して頂きたいと思います。単身赴任の方も多くなりますが体調管理にも十分に気をつけて頑張って下さい。

そして、第二に建設事業部は、昨年からのネッツトヨタ道都白石や、北四条ビル（ＴＲビル）、北海道銀行屯田支店の受注の実績を更に拡大し、大規模の受注に力を入れて行きたいと思います。品質、工事管理も厳しい仕事ですが現場担当の方は、新しいことにチャレンジ出来ることを喜びと心得て、全力を上げて良い工事をして下さい。

第三に全体に言えることですが、今まで以上にお客様から必要とされる企業になることです。そのためには各自が研究する、能力を磨くことが大事です。躯体がＮｏ１の技術力を誇れるのはその例とも言えます。昨日よりも今日は少しでも成長している姿が必要です。

最近の傾向としての『こだわり』に応えていくこと、環境に対する配慮も重要です。ＡＳＪの活路もこの辺にあると思います。

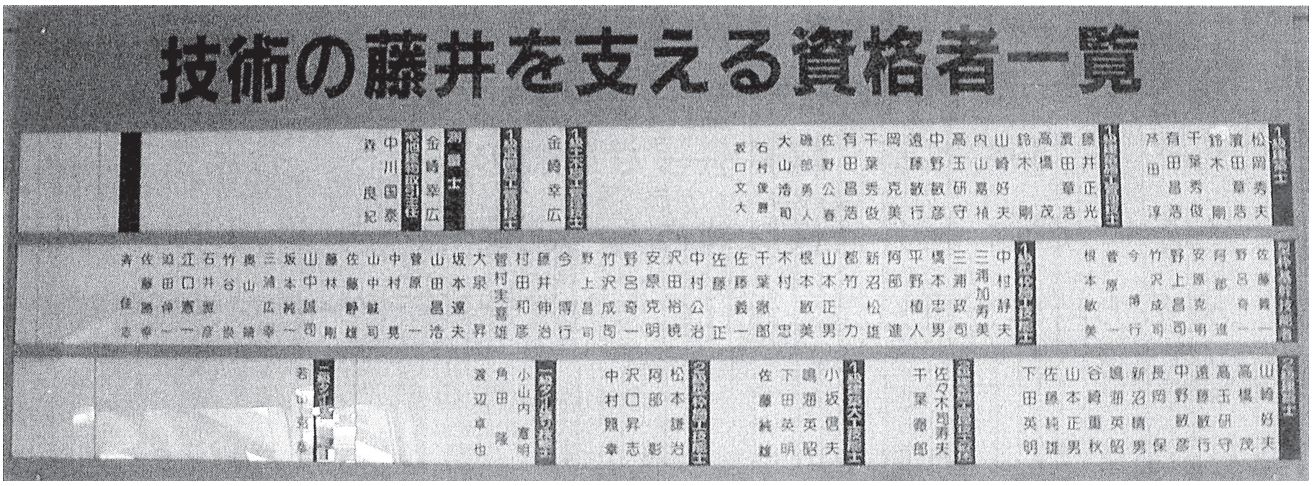
そしてプライベートでも今年は何か課題を持って下さい。『禁煙』『メタボ脱出』『資格取得』――なんでも良いと思います。皆さんが元気でイキイキしていることが何よりも会社の財産です。

そのためには昨日と同じ自分でなく、各々が成長し続けることが大事です。牛のような歩みでも確実に前進することが必要です。様々な困難が私たちを待ち受けていると思います。社員・従業員の結束と努力でいかなる難局も乗り越えなければなりません。

最後になりましたが、皆さんの一層のご健勝とご多幸をお祈りして、新年のご挨拶とさせて頂きます。」

社長挨拶にある藤井グループの資格者は平成20年現在で97名

その内訳は、一級建築士６名、二級建築士12名、一級建築施工管理技士12名、一級土木施工管理技士１名、型枠基幹技能者９名、一級型枠施工管理技能士42名、一級建築大工技能士４名、一級タイル張り技能士３名、二級型枠施工管理技能士４名、二級タイル張り技能士１名、宅地建物取引主任者３名であります。





ＯＨＳＡＳ18001：2007認証状

平成22年、ＯＨＳＡＳ18001：2007認証取得

労働安全衛生マネジメントシステムです。

これは安全環境プロジェクトの金崎幸広さんが中心となり皆で協力し合い取得のため頑張りました。

型枠関連の会社での認証取得はおそらく道内でわが社が初のことでしょう。

平成23年、2011・３・11　　東日本大震災

（北海道建設新聞掲載記事より――――――　　一部省略した）

「東日本大震災の被害状況について、藤井工務店東北支店の中村静夫支店長が電話取材で語ってくれた。支店がある仙台市内は陸の孤島と化し、食料やガソリンの絶対的な不足と、今なお続く余震におびえる過酷な環境にあるという。『本当は何もかも投げ捨てて帰りたい』と本音をもらすが、被災地復興への使命を胸に踏みとどまっている。

支店長によると、食料品は『コンビニやスーパーの棚が全て空っぽの状態だ』と入手困難な現状にあり、深刻さが報道される燃料は『ガソリンは前の日から並んだが、2000円分しか買えない。品切れのスタンドが続出している』と被害地の現実を明らかにした。

同支店では震災直前まで、大手ゼネコンの下請けで福島県内の医療センターと裁判所の新築、岩手県一関市で病院新築の躯体工事を進めていた。

支店長は地震発生当時、仙台から北側約80㌔にある一関市の現場にいた。マグニチュード9.0の揺

れをもたらした巨大地震の震源地に極めて近く、『地面が波を打ち、立っていられなかった』と騒然とした様子を振り返る。

宮城野区扇町にある支店事務所は軽量鉄骨造２階建て。その２階にある事務所は書類や机、椅子などが散乱し足の踏み場もなくなった。津浪は１㌔手前で止まったが『水位があと１㍍高ければ裏の川を伝って確実に襲ってきたはず』と胸をなで下ろす。

同社が雇う型枠大工の出身地は、陸前高田や釜石市に集中している。支店長も陸前高田出身で『実家が津浪にのみ込まれた。親族の安否は不明。被災地を回ったが、むごいの一言に尽きる。大工の身内もほとんどが死んでしまったようだ』と語る。

日が経つにつれて、福島第一原発は爆発や放射能漏れの事故を繰り返し、事態が急展開で悪化。元請のゼネコンが現場から撤退すると同時に、同社も型枠大工を引き上げさせた。地震発生から５日目、３月15日、支店長の判断で型枠大工７人をワンボックスカーに乗せ、本社のある札幌に戻るように命じた。運よく青森からのフェリーに乗れ16日に札幌に帰った。

支店には支店長と山本一郎さんの社員２人と地元の型枠大工８人が残って市内の応急復旧に当っていた。しかし、日増しに食料事情は悪くなり、ライフラインも都市ガスの供給がストップしたままだ。札幌の本社に“ＳＯＳ”を発信したところ、仙台からやっと帰った型枠大工の上川勝佳さん、浜塚義久さんが再び被災地に向うと名乗り出た。18日ワンボックスカーいっぱいに積み込んだ、カップ麺や、カセットコンロ、飲料水、燃料が支店に届いた。作業員宿舎に泊まりこんでいた仲間も息をつけた。

『この惨状を北海道の人に言ってもピンとこないようだ。本当なら何もかも投げ捨てて帰りたい。だが復興の仕事が待っている』と気力を振り絞っている」



S57年　福田利昭さん

北海道建設新聞の中村支店長への電話インタビュー記事は単に震災の一コマというだけでなく、建設業に従事するものの社会貢献の姿勢、社員・従業員への配慮の姿勢、そして又仲間を大切にする姿勢、ふるさとへの愛情として大事なことが詰まっています。

会社経営理念の「社長のことば」が浸透している例でしょう。

震災報道のテレビで、陸前高田市の被災地に応急フロ釜を造って被災者・避難民に提供している大工さんを見た人も多いと思います。

知る人ぞ知る、当社を勇退し故郷に帰っていた名物大工の福田利昭棟梁でした。

平成24年５月に本社社屋を札幌市北区新琴似７条17丁目に移転しました。

麻生本社敷地への札幌市道設置と、それに伴う下水道処理場の拡張による立ち退きによるものでした。

藤井会長　建築事業関係功労で旭日双光章を受章





1959年、日大工学部建築学科の在学中、父親が51歳で急逝し、大学３年のときに社長を受け継いだ。以来、ものづくりの「心」を忘れずに型枠大工の育成に心血を注いできた。

戸籍名は「兼光」。二代目兼蔵を襲名した同氏は戸田組（現戸田建設）の型枠工事の専属下請けだったが、その後総合建設業へ発展させた中興の祖。

「右肩上りで工事がどんどん増えていった時代だから、うまくいったんです」と謙遜するが、旺盛な好奇心と行動力は躯体業界でも定評がある。

だが、バブル崩壊以後、社業の大きな柱である躯体事業部が施工単価の下落と工事量の減少で塗炭の苦しみを味わっている。

「建設産業は『成長産業』から『淘汰（とうた）産業』へ、そして『ご苦労さん産業』に代わりつつある。時代の流れだ」

いつも気に掛けているのは、現場の第一線で働く職人のこと。「われわれは低単価のしわ寄せを職人に押し付けている。品質の良いモノを造っていくためには、これ以上職人をいじめてはいけない」と苦渋の表情を見せる。「ものづくりの仕事は絶対になくならない」が信念。苦境を乗り切っていくためには「経営者のモラルを確立していく必要がある」と強調し、元請企業に対しては「安全、品質、工程を自主管理できる優良な業者を適正に評価してほしい」とうったえる。　（平成15年７月の北海道建設新聞の「人」から）

「会社のあゆみ」に在るとおり、藤井工務店のあゆみは藤井兼蔵のあゆみでもあります。

そこには、平成20年５月旭日双光章を受章した会長の人となりが表れています。

６月７日の安全大会の席で披露され、藤井公人社長から「藤井会長個人が受けた叙勲ではあるが、従業員のみなさん・元請のみなさん・躯体協のみなさんたちのバックアップがあって可能となりました。そういう意味では会社が受章したといえる叙勲です」とのお話しがありました。社員・従業員一同がわが事のように歓喜しました。



佐藤義一職長

11月には佐藤義一職長が瑞宝単光章を受章いたしました。

「仕事の内容が著しく危険性の高い業務に精励した者。精神的に著しく労苦の多い環境において業務に精励した者。人目につかない領域にあって、多年にわたり業務に精励した者」にあたえられる物で「30年以上業務に従事していて、特に功績が顕著な55歳以上の者」（いわゆる現場職）に授与される勲章です。

当社では、藤井会長に続き二人目の快挙でした。

会長の叙勲は業界の発展に寄与した経営者が対象でしたが、佐藤義一さんは現場職の代表としての叙勲です。一つの会社で二名の叙勲者がいる中小企業はまれです。



野上昌司職長

平成26年には野上昌司職長が国土交通大臣顕彰を受賞しました。

藤井工務店の70年のあゆみを振り返りました。

忠実な記録というよりは、歴史の中のエピソードや会長の考えの記述が中心になりました。

そこには、多くの社員・従業員が築こうとした仕事の苦闘や喜び・涙や笑い・悔しさや充実感、さまざまな姿がありました。

初めての足場で震えた脚、命綱に安全帯のフックをかけ忘れ“さしがね”でヘルメットをどつかれた日、墨出しを間違えて徹夜残業になった夜、初めての契約でお寿司の出前が出てうれしかった日、現場慰労会で調子に乗って呑みすぎ、ドラム缶製の焼肉コンロに倒れかけた夜、などなど

70年にわたる千人の社員・従業員の努力と失敗と頑張りが脈打っています。

今、新たな気持ちで私達の頑張りが、万人のお客様の喜びの笑顔につながることを願いながら、100年の藤井工務店に向けて、確かな未来へ、奮闘しましょう。